

八月 総評

立花開

西瓜、俺って

なんでこんなに

馬鹿なのか

大橋 弘典 群馬県

本当に自分の情けない部分を知ったとき、人にはその想いを吐き出せない。夏の明るい陽射しを背に、自身で一層濃くなった影の中にある西瓜にのみ吐き出した心。陰影がくつきりと感じられる。

夢の粉をまぶされて遅くなる手足

西尾日月 島根県

歳を重ねるごとに夢が重りのようになっていくのはなぜなのだろう。大それたものでない、平凡な夢でさえ叶わない。夢を抱くことを「夢の粉をまぶされる」という表現にした面白さ。何者かの気まぐれで味付けられた人生のよう。

夕立の上はぞくりと青い空

詩央えみる 大阪府

青さが見える、そんな作品だ。我々人間は夕立が降っているときはその領域しか見えなと思うが、その上の部分を感じている。見えるものと見えないもの。本当は、後者の方が鮮やかなのかもしれない。

たましいのかたちのランプ

皷がある

桜庭 紀子 和歌山県

「たましい」という人間の最も深い部分にあるものに、皮膚にのみできる「皷がある」。たましいは目に見えず、ランプもどのようなかたちか誰にもわからないが、皮膚で作られた調度品のような不気味さがある。その形や皷にどのような意味があるかも分からない。

鱗粉をくぐった指はもどらない

わたしの夢へ泣きにくる人

石村 まい 兵庫県

鱗粉を剥がされた蝶は、飛ぶことができない。美しいものを手に入れたかっただけなのに汚れてしまった指。後悔なんてそんなものだけど、その「人」は受け入れることができなかった。夢でしか懺悔もできない。

眠りの卵形

身体を

夏草

匂う

ほしはかせ 群馬県

今月は見えないものを鮮やかに描く作品が多く、この世がいかに儚いものの寄せ集めであるかを感じさせられる。夏草の瑞々しい気配や匂いのする風が卵形の眠りを撫でていく。眠りが卵形であるという感覚の、儚いものが多いこの世に対する信頼感。

山芋に混ぜられて寝るように泣く

小宮 颯人 東京都

すべてが比喻でありながら、泣き疲れて体の中が溶けて空洞になってゆくような心許なく成す術のない感覚が伝わってくる。山芋という切り口が独特で読み手によっては分かれてしまうが、「泣く」までの力強さに主体の世界観として受け取りたい。

雲すべて消えて躁鬱入れ替わる

桜庭 紀子 和歌山県

雲が消え去るまでの時間。消えかけたところに新たな雲が現れたり停滞する雲があったり、長い長い時間をかけてすべての雲が消え空が見えた。躁鬱の入れ替わりという、再び簡単に戻ってしまいそうな一瞬に救いを見出している。

火傷した声にそうめん押しあてる

千葉羅点 愛媛県

何を経由した火傷かはわからないし声も物質としてみることはできないが、その声や喉によく冷えたそうめんを押し当てる。すなわちそうめんを食べていることなのだろうが、食事を食事と思わせない描き方が面白い。

微笑んで体が和紙になっていく

カンゾーネ 北海道

肉厚で瑞々しい体が、何かしらを消耗することで薄く乾いた紙の存在に変化していく。本心ではない微笑みを浮かべないといけない場面が何度となく訪れ続け、一番外側の見た目は変わらないが内面は全くの別物となってしまった。